

令和 6 (2024) 年度

F D 研究部会活動報告書

第 1 6 号

徳 島 文 理 大 学
徳島文理大学短期大学部

巻 頭 言

私たち教員は、何を目的にして、何を伝えたくて、日々の教育をおこなっているのでしょうか。普段、このことを自らに問いかけることは稀です。教室にいる学生は、何を得たのか、何を思ったのが。このことを、学生に問いかけることも、また、稀です。

米国の大学で始まった Faculty Development (FD) 活動は、大学教員の教育能力を高めたいという理念で始まりました。日本では、2000 年頃に FD 活動が始まりました。ところが、その活動の主体が授業内容を点数評価するという一面的で硬直したものであったため、いかに効果的な講義であっても、点数には反映されないという弊害がすぐに露呈しました。

徳島文理大学は、学期ごとに、授業アンケートを実施しています。授業アンケートの評価は、学生の基礎学力、やる気、興味の濃淡などで、バイアスがかかることもあります。いくつかの問いのうち、講義資料は十分に準備されていたか、分かり易く説明していたかについては、実態を客観的に反映した数値がでる傾向があります。教員自身と学生側の授業評価が異なることもあるでしょう。ただし、これにより、教員は、学生が自分の講義をどのように感じていたかの大枠を、ある程度は、知ることができます。授業アンケートの結果は、授業の学修効果を考える際の参考になります。

私たち教員のおこないは、学生の将来に大きく影響します。講義室での大人数教育の一方で、学生一人ひとりの学修目的、学修意欲、学力にあった個別指導も求められています。この難しい按配と舵取り。私たちの「腕の見せどころ」です。授業はもちろん重要ですが、学生の悩みや迷いにも寄り添いながら、入学した学生全員が、目的を達成して、笑顔で卒業するまで、日々の業務をしていきましょう。

副学長 梶山 博司

目 次

1. はじめに	1
2. F D活動の内容	2
3. 研修会	4
4. 全学授業アンケート	6
5. 研究授業	8
6. 卒業予定者対象・大学生生活満足度アンケート	13
7. 在学生対象・学修状況アンケート	22
8. おわりに	34

1. はじめに

F Dは、大学設置基準「(教育内容等の改善のための組織的な研修等)第二十五条の三 大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする」(平成 20 年 4 月 1 日施行)により法的義務となった(短期大学も同様)※。本学の「F D研究部会」(以下「部会」)も、平成 19 年 12 月、F D活動の推進・研究を目的として設立された。その後、「徳島文理大学教育開発機構設置要綱」

(平成 29 年 4 月 1 日施行)にて、「当面する教育上の諸課題又は学長からの諮問事項を研究協議」する「学長直属の教育開発機構」内の組織として、(1) 全学教務委員会 (2) 入試制度検討部会(入学前教育を含む。)(3) 全学共通教育研究部会と並んで (4) F D研究部会と位置付けられた(資料編 1 頁参照)。

部会の構成員は、各学部から 1 名ずつ(ただし保健福祉学部は各キャンパスから 1 名)選出され、学長により任命される。それらのメンバーを中心に F D活動を行ってきた令和 6 年度の報告書が、本誌、第 16 号である。

2. F D活動の内容

大学設置基準は、令和四年文部科学省令第三十四号による大幅な改正が行われた（施行日：令和四年十月一日）（傍線は引用者）。F Dは、新たに置かれた「第三章 教育研究実施組織等」の中に規定された。すなわち、（組織的な研修等）「第十一条 大学は、当該大学の教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、その教員及び事務職員等に必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修（次項に規定する研修に該当するものを除く。）の機会を設けることその他必要な取組を行うものとする。2 大学は、学生に対する教育の充実を図るため、当該大学の授業の内容及び方法を改善するための組織的な研修及び研究を行うものとする。3 大学は、指導補助者（教員を除く。）に対し、必要な研修を行うものとする」における第2項に置かれた。

第1項に「教員及び事務職員等」とあるように、一層の教職協働を進める組織的研修（S D）がまず規定され、それに含まれない研修としてF Dが位置付けられている。そして、第3項には、指導補助者という新たな職員に対する研修を規定している。これは、学生へのより手厚い指導体制の確保のためとして、授業へのT Aなどの参画が促進され、「（授業科目の担当）第八条 3 大学は、各授業科目について、当該授業科目を担当する教員以外の教員、学生その他の大学が定める者（以下「指導補助者」という。）に補助させることができ、また、十分な教育効果を上げることができると認められる場合は、当該授業科目を担当する教員の指導計画に基づき、指導補助者に授業の一部を分担させることができる」との規定を置いたことに伴うものである。

さて、愛媛大学の教育・学生支援機構に長く在職され、本学のF Dにも多くのご協力をいただいた佐藤浩章先生（東京大学大学総合教育研究センター教授）は、かつて「F Dにおける臨床研究の必要性とその課題ー授業コンサルテーションの効果測定を事例にー」『名古屋高等教育研究 第9号』（名古屋大学高等教育研究センター、2009年3月）で、次のように指摘されていた。

「F Dはその特性から、研究の対象としてではなく、実践として語られることが多い。その特性とは、研究対象として公開できない（秘匿性）、普遍性に欠ける（事例の特殊性）、手続きが厳密でない（対象選択の非制御性）、方法論の一貫性の欠如（各種方法論の混在）、客観性に欠ける（対象への介入・関係性構築）、即時の問題解決が求められる（即効性）といったものである。」「これらの特性から、F Dの記述は『学術論文』になりにくく、『事例報告』になりがちである。『事例報告』は実践者自身の学習あるいは、新規参入者に対する教育訓練には有用であるが、『研究』としての評価は高くない。」

ここで示された＜F Dはその特性から、実践として語られることが多い＞＜F Dの記述は事例報告になりがちである＞＜事例報告は実践者自身の学習あるいは、新規参入者に対する教育訓練には有用である＞とのご指摘こそが、新たなF Dである「指導補助者（教員を除く。）に対し、必要な研修」において注目されるべきであると思われる。

なぜなら、学生へのより手厚い指導体制の確保のためとして、授業へのT Aなどの参画が促進され、新たに大学設置基準に「（授業科目の担当）第八条 3 大学は、各授

業科目について、当該授業科目を担当する教員以外の教員、学生その他の大学が定める者（以下「指導補助者」という。）に補助させることができ、また、十分な教育効果を上げることができる認められる場合は、当該授業科目を担当する教員の指導計画に基づき、指導補助者に授業の一部を分担させることができる」との規定が置かれているからである。

F Dに不可欠である『事例報告』は、新規に参入する指導補助者に対する教育訓練に有用であるだけでなく、教育実践者一人一人の常なる学習となる。

このことを踏まえ、今年度の具体的なF D活動を報告する。

3. 研修会

3-1 現状

本学F D研究部会の取り組みとして、教育に関する研修会の開催がある。これらは、主に「学内研修会」「学外研修会」「新任・昇任教員研修会」の3つの形で展開している。

本年度実施した学内でのF D研修会は2回で、下記(1)に示すとおりである。また、新任・昇任教員研修会は、第2～4回は第1・2回F D研修会および(2)の学外研修会を兼ねている。

(1) 学内研修会

第1回F D研修会（S P O D遠隔配信・第2回 新任・昇任教員研修会を兼ねる。）

- ・日時：7月2日（火）
- ・演題：「大人数講義法の基本」
- ・講師：上月 翔太先生（愛媛大学 教育・学生支援機構）
- ・実施方法：Zoom 接続にて実施する。

第2回F D研修会（全学F D研修会：全教員必修・第4回新任・昇任教員研修会を兼ねる。）

- ・日時：9月17日（火）～10月31日（木）
- ・演題：「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて
- ・講師：田村 学先生（國學院大學 人間開発学部）
- ・実施方法：各自でログインし、動画を視聴（所要：25分）する。
- ・視聴後にアンケートに回答する。
- ・受講者：徳島キャンパス 174名、香川キャンパス 84名 合計 258名

(2) 学外研修会（S P O D：四国地区大学教職員能力開発ネットワーク・第3回新任・昇任教員研修会を兼ねる）

S P O Dフォーラム 2024

- ・日時：日時：8月28日（水）～30日（金）
 - ・場所：香川大学幸町キャンパス
 - ・演題：「Connection～これからの学びを考える～」
 - ・実施方法：対面
- ※台風10号の影響により、全研修プログラムを中止

(3) 新任・昇任教員研修会

※昇任教員は、助教・講師に昇任された先生の内、これまで研修を受講されていない先生

- ・研修回数：4回であるが、そのうち3回はF D研修会（学内2回、学外1回）と同時開催

第1回新任・昇任教員研修会

- ・日 時：4月3日（水）
- ・内 容：学習支援システム Google Classroom を利用した遠隔配信授業について
- ・実施方法：①新任教員には、資料及び参考図書（「いちばんやさしい Google for Education の教本」）を、新任教職員研修会（総務部主催：4月3日（水））にて配付する。
②資料及び参考図書を参考にしながら、各自で研修する。
③希望者は、体験型の研修を受講する。（4月中）

第2回新任・昇任教員研修会

- ・内容は、第1回FD研修会に同じ。

第3回新任・昇任教員研修会

- ・内容は、学外研修会（SPOD：四国地区大学教職員能力開発ネットワーク）に同じ。

第4回新任・昇任教員研修会

- ・内容は、第2回FD研修会に同じ。

3-2 点検・評価

ポスト・コロナの環境のもと、対面とオンラインを適宜組み合わせることで、多様な研修機会を準備できたものの、昨年度3回実施した学内研修会が今年度は2回にとどまったこと、8月末に予定されていた学外研修会が台風の影響で中止となったことにより、実際に提供できた研修会は、昨年度を下回る結果になった。

全教員が受講することになっている第2回FD研修会の受講者数は、

徳島キャンパス 受講者数 174名

香川キャンパス 受講者数 84名

合計 受講者数 258名

となっている。各自が都合のつく時間に動画コンテンツを視聴する形式で実施された研修スタイルは、今後も継続すべきであると考ええる。

3-3 改善計画（改善点）

今年度は、結果として研修の実施回数が2回にとどまった。オンラインやオンデマンドによる研修の形式も定着しつつある中で、次年度以降、3回の研修会を行うことを想定して、そのうち1回は本来持っている学びの効果を引き出すために、対面でのワークショップないしはアクティブラーニングといった形での研修の機会を提供することも重要であると考ええる。

全学授業アンケート

現状

本学では平成 20 年度以降、授業改善のための基礎資料を収集する目的でアンケート形式により学生の授業評価を実施しており、以下の 2 つの目的に資するデータを得るべく実施している。

- (1) 学生自身の学びの振り返り・自己評価に基づく、学習態度・方法の改善
- (2) 受講生全体の自己評価の確認に基づく、教員の授業内容・方法の改善

平成 25 年度からは、ハイブリッド授業評価アンケート方式を導入した。すなわち、学生による授業評価と、担当教員による評価結果に対するコメントと翌年度授業への対応記載という、学生と担当教員の双方が関与する方式である。令和元年度には、「全学授業アンケート」と名称を変更し、令和 3 年度からは機能拡張を図り、第 1 クォーターや第 3 クォーターの受講学生が、受講期間中にアンケートの回答を実施できるよう「早期モード」機能を追加して継続している。

点検・評価

(1) アンケートの実施状況

アンケートの実施スケジュールは以下のとおりである。

前期：学生アンケート 7 月 8 日(月) ～ 8 月 31 日(土)
集計結果の公開 9 月 2 日(月) ～
教員コメント 9 月 2 日(月) ～ 9 月 30 日(月)
集計結果・教員コメントの公開 10 月 1 日(火) ～
後期：学生アンケート 1 月 7 日(火) ～ 2 月 7 日(金)
集計結果の公開 2 月 12 日(水) ～
教員コメント 2 月 12 日(水) ～ 3 月 14 日(金)
集計結果・教員コメントの公開 3 月 14 日(金) ～

学生のアンケート対象者数、回答数および回収率を表 1 に示す。

表 1 授業アンケート実施状況（令和 6 年度）

	前期			後期		
	対象数	回答数	回答率(%)	対象数	回答数	回答率(%)
全 体	33, 522	23, 231	69. 3	33, 452	22, 129	66. 2

学生回答率の母数となる『履修登録している学生の総数』について、前期分は令和 6 年 5 月時点、後期分は 12 月時点に教務システムに登録されている履修登録数の総数を母数とした。

また、開講科目の中で受講している学生が5人以上の科目に対して、学生が授業アンケートに回答している科目がどの程度であるかの集計を表2に示す。

表2 授業アンケート回答状況：5人以上の開講科目数（令和6年度）

	前期			後期		
	開講科目数	回答科目数	回答率(%)	開講科目数	回答科目数	回答率(%)
全体	1804	1788	99.11	1475	1442	97.76

(2) 教員によるフィードバックの状況

フィードバックである教員コメントの記入率は表3に示す。

表3 教員コメントの記入率（令和6年度）

	前期 (%)	後期 (%)
全 体	78.7	77.5

教員回答率の母数となる『教員の担当科目数の総数』について、前期分は令和6年5月時点、後期分は12月時点に教務システムに登録されている教員の担当科目数の総数を母数とした。

授業アンケートの集計結果と教員コメントの開示範囲は学内のみとし、開示期間は教員コメント記入期間の約1週間後から1年程度である。

4-3 改善計画（改善点）

今年度の学生対象者数に対する学生回答率は、前期 69.3%（前年度 64.6%）、後期 66.2%（前年度 65.0%）であった。前年度は前期・後期とも同じ回答率であったが、今年度は前年度より回答率はアップし、特に前期の回答率は上回った。他方、5人以上の開講科目数の回答率でみると、前期 99.11%（前年度 96.0%）、後期 97.76%（前年度 96.2%）の高い回答率であった。少人数の科目を除けば、97%以上の高い回答率であることが分かった。

教員のコメントの記入率では、前期 78.7%（前年度 58.4%）、後期 77.5%（前年度 65.0%）であった。前期、後期ともに回答率が前年度を19%以上上回った。学生への回答は重要であることを各教員が認識し回答率を向上させた結果となるが、まだまだ向上する必要がある。非常勤講師への対応などを含め、今後も回答率向上のために具体的な対策を検討していくことが必要と考える。

この「全学授業アンケート」が、学生自身の学習の振り返りと、今後の学習強化ならびに本学の教育の質の向上に寄与できるようにしなければならない。そのために、アンケート回答率のアップを目指し、学生および教員へこれまで以上に徹底した周知を図る必要がある。今後、さらにアンケートの目的を達成するためにも、内容・実施方法等についても議論を重ね、より良いものにしていきたいと考えている。

5. 研究授業

5-1 現状

「研究授業」の実施は、平成 20 年度後期より徳島・香川両キャンパスの全学部・学科において実施しており、今年で 17 年目となる。

令和 6 年度、「教員相互による授業参観型」の研究授業は、徳島キャンパスおよび香川キャンパスで 21 科目（前期 11 科目、後期 10 科目）実施された。

(1) 目的

「教員相互の授業参観型」は、研究授業開始以降、実施され続けている形である。教員が授業を参観することにより授業改善のために参考になるもの、取り入れられるものを見つけ、自分自身の授業に活かしていくことを目的としている。各教員の教授法の向上と学生の理解力や思考力の向上をめざしており、授業担当者の教授法に対し悪い点を指摘するためのものではない。

「目標設定型」は平成 24 年度より導入している。あらかじめ教授方法や授業運営上の改善点を設定し、定めた期間の中で調査・研究を行うものである。効果的な授業技術の掘り起こしとそれらの共有が主な目的となる。

(2) 実施方法

各学部及び学科は、「教員相互による授業参観型」「目標設定型」のどちらか、もしくは両方の研究授業を選択することができる。年間の実施頻度は各学部及び学科に委ねている。新型コロナウイルス感染症が 5 類に移行された昨年度からは、従来通りの「教員相互による授業参観型」「目標設定型」に加え、遠隔配信授業となる状況においてはオンライン研究授業も含め、研究授業を実施するか否かの判断そのものを各学部及び学科に委ねた。

対面による「教員相互による授業参観型」の場合は、学期始めに各学部及び学科の授業担当者と研究授業を補助する授業協力者を定め、授業担当者は研究授業を対象とする科目及び実施日を決める。実施科目と実施日については F D 研究部会が情報をまとめ、事務局が「研究授業予定」一覧表を作成し全学の教員に周知した。

参観範囲は、所属学科に限らずどの科目も参観可能である。研究授業の進行及び記録は授業協力者（あるいは学部、学科の評価・F D 委員会）が行い、原則として 1 講時 30 分の内授業開始から 60 分を授業参観とし、残りの 30 分を授業担当者、授業協力者及び授業参観者による意見交換会の時間とした。ただし、香川薬学部では 1 講時 30 分の講義時間を確保するため、研究授業は 2 講時に実施し、昼休みの時間に意見交換会を行っている。そのため、講義時間、曜日や教室の変更を教員に依頼することもある。意見交換会では「(1) 目的」にある研究授業の主旨に基づき討議を行った。研究授業実施後は、2 週間以内に別紙の様式（図 1）に授業担当者と授業協力者（あるいは学部、学科の評価・F D 委員会）によって、研究授業記録を作成することとした。研究授業記録は F D 研究部員を通して F D 研究部会へ提出される。

また、コロナ禍になってから実施されているオンライン研究授業は、Google Classroom を用いた研究授業である。事前に周知されている「研究授業予定一覧表」の「教室/クラスコード」にあるクラスコードを使って入り、当日、教員は自由に Google Classroom 上で参観できるようになっている。

研究授業（教員相互の授業参観）記録			
学 部		学 科	
授 業 者		科 目 名 (シラバス番号)	()
授業協力者		実施教室	
実 施 日 時	平成 年 月 日 曜日 講時		
対 象 学 生			受講学生数： 名
ま ち だ			
授業テーマ			
研究授業内容自己評価			
研究授業参観者の意見・感想			
授業参観教員数	名		

研究授業（目標設定型）記録			
学 部		学 科	
実施代表者			
実 施 期 間	平成 年 月 日 ～ 平成 年 月 日		
目標の説明			
対 象 学 年 または科目	受講学生数： 名		
具体的な取組み方法			
結果			
協力教員数	名 (内訳)		

図 1 研究授業記録様式

5-2 点検・評価

表 3 に、今年度と過去 11 年間の学部、学科別の研究授業実施数と参観者数の推移を示した。今年度の年間研究授業実施数は 21 科目であり、昨年度と比較すると若干減少した。1 科目あたりの参観者数は 4～5 人程度と、必ずしも多くの教員が参加している状況では無い。「目標設定型」の研究授業は、今年度も実施報告がなかった。

研究授業の実施は、基本的には昨年度と変わらない実施方法、評価方法となった。「教員相互による授業参観型」は昨年度から新型コロナウイルス感染症の 5 類移行が実施されたことにより、研究授業を再開実施する学科が増えた。しかしながら、国家試験を控える医療系の学部学科では、多人数が集まる研究授業の開催に慎重な姿勢をとるところが依然多かったせいか、一部を除いて開催は低調であった。

表 3 学部、学科別の研究授業実施数と研究授業の参観者数(名)の推移

表3 学部、学科別の研究授業実施数と研究授業の参観者数(名)の推移

年度	平成26 2014		平成27 2015		平成28 2016		平成29 2017		平成30 2018		平成31 2019		令和2年 2020		令和3年 2021		令和4年 2022		令和5年 2023		令和6年 2024	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
年間研究授業実施数	4	15	15	18	10	18	10	16	10	21	7	17	6	5	1	8	4	10	15	11	11	10
香川薬学 薬学科		9		9			7			8							9					
文学部	日本文学																					
	英語英米文化	4			2		3				3			2				2			2	
	文化財			5		5						3							4			1
	宿泊セミナー	6		5、4		4、5	4			5												
理工学部	学部内合計	15	4	14	9	11	5	11	3	5	14	3	3				9	2	4	7	2	1
	機構創造		2		5	4	3					1										
	電子情報					6																
	ナノ物質																					
薬学部	学部内合計		2			10					2											
	薬学科	7	7	未提出	未提出	4	4	4	8	7	4	11				8						
	人間生活		2	3		3				2		1		5			4		1		2	
	食物栄養		1	4	2	1	7	7		7、8	3					3		1		2		1
人間生活 学部	心理		2	2	3	3	4		1	3	1					6		2	5			7
	児童		2	5	1	1	1	4		3		3				1		0			2	
	行動科学		1		4	1		2		2		4				6		4		2	4	
	建築学		1	3	2	2		2				2					2		2		2	
総合政策学部	学部内合計		9	17	12	10	15	18	1	25	4	10					6	7	10	4	10	8
	総合政策		6	5	10	3	3		3	2							4		5			
	音楽			0	2	1	3		2			2										
	音楽学部																					
保健福祉学部	臨床工学			5				3				5										
	診療放射線					0				0		0										
	人間福祉			1		4	4	4	3	2		2		2		1		2	2		3	
	理学療法			1	1	0	1					0										
短期大学部	看護	8	13	9	12	7	8	5	5	5	4	5		17	17	10		14		13	8	14
	口腔保健											2										
	学部内合計	8	13	11	18	11	13	9	12	17	2	4	14				4	16	2	13	11	14
	保育				5											7		5	10	8	9	
短期大学部	生活科学				7			1						3					5	4		5
	商科						5					3							4	2		2
	言語コミュニケーション																		5	1		3
	音楽																					
前・後期別 年間参観者数	学部内合計					5		1				3						14	16	14	9	10
	参観者数	30	54	69	89	58	74	62	65	50	75	40	65	6	29	42	19	39	57	61	52	52
	総人数																					
	1科目当たりの参観者数	7.5	3.6	4.6	4.9	5.8	4.1	6.2	4.1	5.0	3.6	5.7	3.8	1.0	5.8	17.0	4.8	3.9	3.8	5.5	4.7	5.2

表4には、各学科の授業参観による参観者の意見を一部抜粋したものを示している。各学部及び学科から提出された報告書によれば、「授業は少人数のグループの中で話し合いながら合意形成をめざすというものであった。話し合いで意見をまとめる場合、強く主張する人の意見が通りやすくなりがちであるが、今回はメンバーそれぞれの意見を尊重するという雰囲気ができており、話し合いが機能していたと感じた。授業者が受講生のパーソナリティを把握し、的確な指示ができていたことも大きな要因だと思う」や「予習→テスト→話し合い→解説を聞く」の流れがわかりやすかった。事前資料の学習、確認テスト、正誤の学生同士の話し合いにより理解度の向上に役立てていると感じた。」など、少人数グループを形成し、学生同士の話し合いを取り入れることにより学習効果を向上させる取り組みが増えてきている様に感じる。しかしながら、これらの取り組みには授業者が受講生のパーソナリティを把握し、的確な指示ができることや、学生の予習に適した教材を作成する必要があるなど、教員の負担が増加する側面もある。

表4 各学科の授業参観による参観者の意見と目標設定型の研究授業の効果

[教員相互による授業参観型] 各学科の授業参観による参観者の意見 研究授業報告書より一部抜粋、● 好意的な意見 ■ 改善を求める意見（なお、全記録は別CD資料）
・保健福祉学部看護学科 ●話し方、スライドの内容（地図・動画）、最後にグループワークの説明などわかりやすかった。教員の経験や思いを伝えることは、学生の感性が刺激され自分の将来を考える時に必要になる内容だと思った。 ■国際救護員として活躍している看護師の生の語りが一番良い。次年度は、台湾、韓国などに留学した学生参加も考えていくといいのではないかな。 ・人間生活学部メディアデザイン学科 ●ロボット競技会は初めての試みであったが、学生が積極的に取り組む姿勢が見られ、「情報処理と分析力のスキルアップ」という学習目標に対して一定の成果を認めることができた。 ■プログラムの難易度と時間的な制約のバランスを考え、授業計画を修正する必要があるが、来年以降も継続できる取り組みである。 ・人間生活学部心理学科 ●Mentimeter（リアルタイムでの集計とフィードバックを可能にするアプリ）を駆使することにより、オンライン参加者も対面参加同様に授業への参加意識が高まるとともに、リアルタイムに結果を表示するため、アクティブラーニングの要素もあると思った。 ●他の発達心理学とは異なる視点で「思春期」にアプローチし、生物学的視点、心理社会的視点から重層的に捉える内容になっており、興味深かった。

・短期大学部商科

●他学部で、就活用として電話対応の指導をしているが、学生間の対応力の差が大きく、与えられた時間を考えながら演習する者が少ないのに対し、商科では全員が真面目に取り組んでいた。練習用教材の台詞の修正は上手く作られていて、学生が自力で考えるのにちょうど良いレベルであった

・短期大学部言語コミュニケーション学科

●授業は少人数のグループの中で話し合いながら合意形成をめざすというものであった。話し合いで意見をまとめる場合、強く主張する人の意見が通りやすくなりがちであるが、今回はメンバーそれぞれの意見を尊重するという雰囲気ができており、話し合いが機能していたと感じた。授業者が受講生のパーソナリティを把握し、的確な指示ができていたことも大きな要因だと思う。

・香川薬学部薬学科（反転授業）

●「予習→テスト→話し合い→解説を聞く」の流れがわかりやすかった。事前資料の学習、確認テスト、正誤の学生同士の話し合いにより理解度の向上に役立てていると感じた。確認テストの結果を高い割合で総合成績評価に取り入れることで予習を促している点が参考になった。

■ごく一部の学生が学生間の話し合いに参加できておらず、このような学生へのサポートの仕方が気になった。

5-3 改善計画（改善点）

次年度も新型コロナウイルス感染症などの再燃がない限り引き続き研究授業の実施を継続していきたい。対面で行われる従来通りの形式とオンラインによる実施を併用し、各学科の状況に委ねながら実施していく予定である。

1科目あたりの参観者数は開始当初からは大幅に減少し、ここ数年は4～5人程度で推移している。これは、学部学科によっては担当教員が一巡したことや内容が陳腐化したことが要因であるとも考えられる。しかしながら、近年、大学の教育において学生のアウトプットを伴うアクティブ・ラーニングの取り入れが学生の知識の定着、問題解決能力の醸成に必須であるとされており、具体的な講義における運用方法について学びたい教員の潜在的要望は高いと考えられる。実際、反転授業やグループ学習を取り入れている授業で研究授業を実施したところ、通常以上の参加者があり、活発な質疑応答が行われた。そこで、アクティブ・ラーニングなどを積極的に取り入れている講義担当者に各学部のFD委員から研究授業を依頼するとともに、他学部・他学科への周知を徹底することにより、研究授業の参加人数の増加を図りたいと考えている。また、教員からのニーズが高まれば、アクティブ・ラーニングを取り入れた講義法に関するワークショップを開催するなど新たなFD活動に繋げることも将来的に考えていきたい。

新任・昇任教員は、FD研修会などで授業方法の研修を受けているが、実践の場として、経験豊かな先任教員からアドバイスを受けれる場として研究授業は重要であり、各学部での新任・昇任教員を対象とした研究授業の積極的な開催を期待したい。

6. 卒業予定者対象・大学生生活満足度アンケート

6-1 現状

本学では、卒業生（正確には、卒業時の学生に対する）を対象とした満足度評価アンケートを平成 21 年度から継続的に実施している。卒業生満足度評価アンケートは、学生が卒業時に、入学時から卒業までの期間における学生生活の振り返りをとおして、学生からの本学の教育に対する評価を受け、教育の充実と改善に資する資料を得ることを目的に行われ、外部への情報発信の役割も併せ持つものである。

徳島文理大学
徳島文理大学短期大学部

2025年3月卒業予定者対象
大学生生活満足度アンケート

今年卒業（修了）される学生を対象に実施しています。最終学年以外の方の回答はご遠慮ください。

>この調査は2025年3月に修了される皆様に、本学での学生生活を振り返っていただき、教育内容や施設、学生生活などについての意識を知るためのものです。
>集計結果は本学の教育の充実と改善を図るために役立てます。大変お手数ですが、以下のアンケートに回答をお願いいたします。

【重要】回答者の学籍番号は回答の重複を防ぐために利用するだけで、最終的には誰がどのような回答をしたのかはわからないように集計します。安心して真摯な回答をお願いいたします。

【学籍番号】

【パスワード】（学生ポータルサイト用と同じ）

ログイン >

〔回答時の連絡事項〕
(1) 回答できるのは1回だけです。回答後に回答内容の変更はできません。
(2) 自由記述欄に誹謗中傷的な記入はおやめください。このような記入があった場合には回答を削除することがあります。

徳島文理大学・全学FD研究部会

図 6-1 アンケートログイン画面（学生用）

このアンケートの回答画面のスクリーンショットを図 6-2 から図 6-6 に示す。

卒業生対象・大学生生活満足度アンケート	
	[205200] さんログイン中 ログアウト
回答者（あなた）についてお尋ねします	
性別を教えてください【必須】	
☐ 女性 ☐ 男性 ☐ 答えたくない	
現所属学科の在籍年数を教えてください【必須】	
☐ 1年 ☐ 2年 ☐ 3年 ☐ 4年 ☐ 5年 ☐ 6年 ☐ 7年 ☐ 8年 ☐ 9年以上	
卒業後の進路（回答時の状態）について教えてください【必須】	
☐ 就職 ☐ 進学 ☐ 未定	
あなたの成績について教えてください【必須】	
☐ いちばん多かったのは「優」だと思う ☐ いちばん多かったのは「良」だと思う ☐ いちばん多かったのは「可」だと思う	

図 6-2 アンケート回答画面（1/5）

授業・教育課程についてお尋ねします（全体として）

授業科目は充実していましたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

授業や実習内容はわかりやすかったですか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

専門的な知識や技能（免許・資格を含む）を修得できましたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

教育に対する熱意は感じられましたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

授業以外の指導（学外実習、見学、補習など）は充実していましたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

課題（宿題やレポートなど）の量は適切でしたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

図 6-3 アンケート回答画面（2/5）

大学の設備および支援体制についてお尋ねします（全体として）

就職や進路についての相談・支援は役に立ちましたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

図書館は利用しやすかったですか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

学内のPCやWi-Fiサービスは利用しやすかったですか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

授業や実験・実習に必要な設備は整っていましたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

食堂や売店・コンビニに満足していましたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

困ったことがあった場合、相談できる体制は整っていましたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

図 6-4 アンケート回答画面（3/5）

キャンパスライフについてお尋ねします

キャンパスは清潔でしたか [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

課外活動（部活やイベントなど）に満足しましたか [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

頼りになる教員に出会えましたか [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

よき友と出会えましたか [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

図 6-5 アンケート回答画面 (4/5)

総合評価をお尋ねします

入学時の夢をかなえることができましたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

総合的にみて、本学での学生生活はよかったですか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

知り合いの高校生に本学への進学を勧めたいと思いますか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

本学で良かった点（カリキュラム、設備、お世話になった教員・スタッフ名など）を具体的にお書きください（2000字以内）

ご要望・ご意見・改善案などをお書きください（2000字以内）

回答が終わったらここを押してください
確認画面に移ります

徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部

図 6-6 アンケート回答画面（5/5）

令和 6 年 12 月度の定例合同教授会において、これまでと同様に卒業予定者に対して大学生活の満足度アンケートを実施することを告知し、同時に回答用のシステムをスタンバイさせた。回答の開始日については各学部・学科に委ねることとし、回答終了日については 2025 年 3 月 31 日までとした。回答者に該当する学生に対しては、各学部・学科の担当教員やチュータから適宜回答を依頼した。このとき、回答状況がブラウザ上からリアルタイムでわかるようにしている（図 6-7）。このシステムは各学科（部局）の回答者数を閲覧することができ、さらに回答数のところをクリックすると回答を済ませた学籍番号のリスト一覧が閲覧できるようになっている。ただし、アンケートの回答内

容は表示されない。



所属名	回答者数
《大学院》薬学研究科薬学専攻博士課程	0
《大学院》文学研究科博士前期課程	1
《大学院》文学研究科博士後期課程	0
《大学院》工学研究科システム制御工学専攻博士前期課程	1
《大学院》工学研究科ナノ物質工学専攻博士前期課程	1
《大学院》工学研究科システム制御工学専攻博士後期課程	0
《大学院》工学研究科ナノ物質工学専攻博士後期課程	0
《大学院》人間生活学研究科食物学専攻博士前期課程	0

図 6-7 学科別（部局別）回答状況確認システム

アンケート結果は、全体、学部別に集計し図表に整理した。これらは実施年度の翌年度のはやい時期に定例合同教授会で報告される。また、記入された自由記述欄の内容については一覧にまとめられて部局長会で報告している。

アンケートはインターネットに接続している PC やスマートフォンのブラウザを利用して回答される。このアンケートのログイン画面の URL は

<http://sd.bunri-u.ac.jp/enq/>

である。

6-2 点検・評価

今年度の対象者数は 886 人であった。このうち 754 人から回答を得ることができた。回答率は 85.1%であった。これは、前年度（85.7%）とほぼ同じであった。学位授与式

などで回答を学生に直接依頼するなどした結果が比較的高い回答率につながられていると考えている。所属別の内訳は表 6-2 に示す通りである。

全学全体の集計結果を概観すると、最も高得点は、Ⅳ－４の「よき友と出会いましたか」（4.54 点）であり、例年と同じであった。次に高得点は、Ⅳ－１の「キャンパスは清潔でしたか」（4.41 点）であり、これも例年と同じであった。これ以降としては、Ⅲ－２の「図書館は利用しやすかったですか」（4.39）、Ⅱ－３の「専門的な知識や技能（免許・資格を含む）を修得できましたか」（4.38 点）、Ⅲ－４「授業や実験・実習に必要な設備は整っていましたか」（4.37 点）、Ⅳ－３「頼りになる教員に出会えましたか」（4.36 点）、が例年と同様に高く評価されていることがわかる。今年度目立った変化として、Ⅳ－２「課外活動（部活やイベントなど）に満足しましたか」が昨年度と比べて大きく上昇した（3.56 点 ⇒ 3.72 点）。これは新型コロナ禍が終息し、対面での活動が増えたことが影響していると思われる。このようなことから、卒業生は例年通りに学生時代に良き友と教員に出会い、快適な環境で本学での日常を充実させていたと推察できる。

表 6-2 所属別アンケート回答状況

所属名	卒業者数	回答者数	回答率(%)
人間生活学部	267	249	93.3
音楽学部	8	8	100.0
薬学部	48	30	62.5
文学部	64	60	93.8
理工学部	71	53	74.6
総合政策学部	55	32	58.2
香川薬学部	21	16	76.2
保健福祉学部	247	220	89.1
短期大学部	62	61	98.4
大学院・専攻科	43	25	58.1
全体	886	754	85.1

しかしながら、最も低い得点は、Ⅳ－２の「課外活動（部活やイベントなど）に満足しましたか」（3.72 点）であった。SNS などの普及により、近年の学生たちがこのような活動に興味を示さなくなっていることが低調になっている要因だと考えている。２番目に低い得点は、Ⅴ－２の「総合的にみて、本学での学生生活はよかったですか」であった。これも昨年度と同じであるが、得点はここ数年上昇している（3.80 点 ⇒ 3.82 点 ⇒ 3.89 点）ことは特筆すべきである。この 3.89 点というのは、相対的に低く感じられるが、回答者の約 67%が「そう思う」か「ややそう思う」を選択していることから考えれば、マイナスに解釈する必要はないのかもしれない。

これらの低得点項目は、入試広報委員会や保健管理センター、教務委員会など他委員会や組織体との連携によって改善に資するものと考えられる。卒業生向けの大学生活満

足度アンケートは、FD 研究部会の活動として実施しているものであるが、『FD 研究部会活動報告書』を Google Classroom で全教員に公開しているため、教職員が一丸となって学生の満足度が高くなるよう、今後、各種関連委員会や組織体との連携強化が課題となる。

なお、資料編に、学部全体、短期大学部全体、各学部に分けて数値とグラフを示しているのご高覧頂きたい。

6-3 改善計画（改善点）

(1) 質問項目の検討

このアンケートを始めた当初は、マークシートを利用して限られた時間内で回答する必要があったため、質問項目はできるだけ少なく厳選した。しかしながら、近年の社会環境の変化に伴い、学生がスマートフォンなどの情報端末でアンケートに回答することに抵抗がなくなっていると感じている。これを鑑みると、質問項目を少しだけ増やしても実施上の問題はないのではないだろうか。また、昨年度から開始した在学生全員に実施する学修状況アンケートの質問項目と意図が近いものがいくつか存在するので、学修状況アンケートとの整合性を検討する必要がある。徳島文理大学の学生の満足度を高めるためのより具体的なヒントを得られるような質問項目の追加を部会で検討したい。

(2) 大学生生活満足度アンケート結果を教育環境や教育改善に活かすシステム構築

これまで平成 21 年度～令和 6 年度の 15 年間に渡り、卒業生に対する満足度アンケートを行い、その結果をもとに、改善計画（改善点）をたて、満足度評価の方法論やシステムについて改善を行ってきた。そのことにより、教育環境や教育活動が少しずつ改善されてきているが、まだ十分とはいえない。

多大な費用とエネルギーを費やし実施してきた満足度評価アンケートから教育環境や教育改善に活かす事項が見出されたならば、今後は、その結果を活かすシステムの構築が課題となってくる。卒業生の満足度・不満足度を明らかにする単なるアンケートで終わっては意味がない。今後は、評価結果を活かして機能していくように、例えば、他委員会や組織体との情報共有や連携・協働など教育環境や教育改善に活かすシステム（仕組み）を構築していく時期にきている。

7. 学修状況アンケート（在学生対象）

7-1 現状

本学では、これまでにすべての学生に対して受講した授業の「全学授業アンケート」を、さらに、卒業予定者に対して「大学生生活満足度アンケート」を実施してきた。前者は、授業という比較的狭い範囲に限定した実態調査であり、後者は、授業だけに限らない本学で体験できる比較的広い範囲のものである。これらの集計結果が、本学が学生に提供する様々なサービスの改善に役立ってきたことは自明である。

一方、以前より大学生生活満足度アンケートを卒業予定者に限定せず、在学生に対しても実施してはどうかという意見があった。卒業予定者の場合には、2～6年という比較的長い期間に対する実態調査のため、回答の信頼性に若干の課題（平滑化や時間的なズレ）がある。寄せられた意見の多くは、この課題を解決するために在学生に毎年同様の実態調査を実施することが望ましいというものである。さらに、次回の外部認証評価では、エビデンスに基づいた内部質保証についての評価をしなければならない。内部質保証については授業アンケートだけでなく、広い範囲の学びに関するサービスの実態調査が必要である。以上のことから、係るコストのことを勘案しても、実施する方が本学にとって得策だと判断できるので、全学生を対象とした学習状況を把握するためのアンケートを2021年度から実施することにした。ただし、2021年度は試行とし、2022年度から本稼働とした。今年度は本稼働3年目である。

〔主たる目的〕

- (1) 本学の学生が、一年間に本学で体験した学修活動全般（授業や課外活動など）に関する実態を調査する
- (2) 学生の学力や満足度の向上に寄与する要因を探る

実施方法は、インターネットを利用して回答する他アンケートと同様とし、回答期間は、2025年1月10日から2025年4月13日までとした。今年度の対象者数は3,742人であり、このうち回答したのは1,952人であった。回答率は52.2%である。これは昨年度の61.0%よりは低下したが、一昨年度とほぼ同水準であった。

質問項目は「Ⅰ. 回答者について」、「Ⅱ. 授業・教育課程・学修環境」、「Ⅲ. 総合評価」という3つの大分類に分けられている。さらに、Ⅰについては12項目、Ⅱについては7項目、Ⅲについては3項目、Ⅳについては2項目を設けている。質問項目は前年度のものと同じではなく、一部変更している。

昨年度までは回答した内容を学生（本人）が確認できなかったが、今年度から過去の回答分も含めて学生が自身の回答内容を確認できるような機能を追加した。これは、回答内容に対するリフレクションを行う機会を与えることを意図している。

このアンケートに対して学生は各自のスマートフォン、あるいは大学及び個人のPCのブラウザ上で回答することができる。図7-1にアンケートシステムのログイン画面を、図7-2から図7-5に質問項目（回答画面）を示す。図7-6には、学生用の回答閲覧サイトのトップページ画面を示す。

← → ↺ 🏠 🌐 bunri-u.org/as/ ☆ 📱 📁 📄 👤 ⋮

2024年度 在学生対象 学修状況アンケート

徳島文理大学の在学生全員に対して回答をお願いしています。

この調査は、徳島文理大学の学生の皆さんが、本学においてこの1年間をどのように過ごされたのか（特に学修状況）を把握するためのものです。

集計結果は本学が学生の皆さんに提供する教育サービスの充実と改善を図るために役立てます。大変お手数ですが、以下のアンケートに回答をお願いいたします。

このアンケートの回答にはログインが必要です。
学生ポータルサイトの利用時と同じログインIDとパスワードを入力してください。

【学籍番号】(例：235200)

【パスワード】(学生ポータルサイトと同じもの)

ログイン >

【回答時の連絡事項】

- (1) 回答できるのは1回だけです。回答後に回答内容の変更はできません。
- (2) 自由記述欄に個人名や誹謗中傷的な記入はおやめください。このような記入があった場合には回答を削除することがあります。
- (3) あなたの学修を適切にサポートするため、担任やチュータが回答内容を閲覧することがあります。
- (4) あなたの回答内容を閲覧したい場合は《 [こちら](#) 》をクリックしてください

徳島文理大学・全学FD研究部会

図 7-1 アンケートログイン画面（学生用）

回答者（あなた）についてお尋ねします

現所属学科の在籍年数を教えてください [必須]

- ☐ 1年
- ☐ 2年
- ☐ 3年
- ☐ 4年
- ☐ 5年
- ☐ 6年
- ☐ 7年以上

いま、あなたが大学でやりたいことをすべて選択してください [複数選択可]

- ☐ 専門的な勉強
- ☐ 基礎的な勉強（語学やプレゼンスキルなど）
- ☐ 最先端の研究
- ☐ 資格や免許の取得
- ☐ 社会貢献（ボランティアなど）
- ☐ 自由な時間を楽しむ（旅行や読書、芸術活動など）
- ☐ 学友との交流（サークル活動を含む）
- ☐ 起業などのビジネス
- ☐ スポーツやトレーニング

その他： (15文字以内)

この一年間、授業時間を除く一日あたりの平均的な学習時間を選択してください [必須]

- ☐ 30分未満
- ☐ 30分～1時間
- ☐ 1時間～2時間
- ☐ 2時間～3時間
- ☐ 3時間以上

先ほどの平均的な学習時間は昨年と比較してどうですか [必須]

- ☐ 増加した
- ☐ 変わらない
- ☐ 減少した

いま、あなたの卒業後の具体的な目標（夢）が言えますか [必須]

- ☐ 言える
- ☐ 言えない

図 7-2 アンケート回答画面 (1/4)

この一年間、学修に対するモチベーション（学修意欲）はありましたか [必須]

- ☐ あった
- ☐ どちらかといえばあった
- ☐ どちらかといえばなかった
- ☐ なかった

学内に気軽に相談できる友人や教職員がいますか [必須]

- ☐ いる
- ☐ いない

この一年間、大学で授業を受けたくないと思ったことがありましたか [必須]

- ☐ あった
- ☐ なかった

この一年間、将来のあなたに役立ちそうな何か新しい挑戦をしましたか [必須]

- ☐ 新しい挑戦をした
- ☐ 新しい挑戦をしていない

あなたはストレスに強いですか [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

あなたは自分をコントロールするよりも、信頼できる誰かにコントロールされる方がいい [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

スマホやPCの一日あたりの平均的な利用時間（学修を含まない）を選択してください [必須]

- ☐ 30分未満
- ☐ 30分～1時間
- ☐ 1時間～2時間
- ☐ 2時間～3時間
- ☐ 3時間以上

図 7-3 アンケート回答画面（2/4）

授業・教育課程についてお尋ねします（全体として）

この一年間に受講した授業科目数は多いと感じましたか [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

この一年間に受講した授業内容はむずかしいと感じましたか [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

この一年間に受講した授業は興味深い（有益と感じられた）ものでしたか [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

あなたは授業でわからないことや宿題などをひとりで学修することができますか [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

あなたは集団で学修するより、ひとりで学修する方が好きですか [必須]

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

この一年間、教員または職員と個人的な面談をしたことがありますか [必須]

- ☐ したことがある
- ☐ したことがない

図 7-4 アンケート回答画面（3/4）

この一年間、授業以外の学習活動（講演会、補習など）に自主的に参加しましたか〔必須〕

- ☐ 参加した
- ☐ 参加していない

総合評価をお尋ねします

この一年間に本学で体験したこと（学修や課外活動など）に満足しましたか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

この一年間であなたは自分自身の成長を感じていますか〔必須〕

- ☐ そう思う
- ☐ ややそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ あまりそう思わない
- ☐ そう思わない

この一年間にあなたが本学で体験したもっとも印象に残ったことをお書きください（1000字以内）

《できるだけ記入してください。お願いします》

本学をより魅力的にするために取り組むべきことがあれば提案してください（1000字以内）

《できるだけ記入してください。お願いします》

回答が終わったらここを押してください
確認画面に移ります

徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部

図 7-5 アンケート回答画面（4/4）

学修状況アンケートの回答閲覧

ログイン後に過去の回答内容を確認できます。修正はできません。

回答の閲覧にはログインが必要です。
学生ポータルサイトの利用時と同じログインIDとパスワードを入力してください。

【学籍番号】(例：235200)

【パスワード】(学生ポータルサイトと同じもの)

ログイン >

〔連絡事項〕

- (1) 回答内容の変更はできません。
- (2) 自由記述欄に個人名や誹謗中傷的な記入された場合には、回答が削除されていることがあります。

徳島文理大学・全学FD研究部会

図 7-6 アンケート回答画面 (5/5)

所属名	回答者数
《大学院》薬学研究科薬学専攻博士課程	0
《大学院》文学研究科博士前期課程	1
《大学院》文学研究科博士後期課程	0
《大学院》工学研究科システム制御工学専攻博士前期課程	1
《大学院》工学研究科ナノ物質工学専攻博士前期課程	0
《大学院》工学研究科システム制御工学専攻博士後期課程	1

図 7-7 学科別（部局別）回答状況確認システム

回答期間中は、回答状況がリアルタイムでわかるように、図 7-7 に示すインターネット上で稼動するシステムを構築している。このシステムは各学科（部局）の回答者数を閲覧することができ、さらに回答数のところをクリックすると回答を済ませた学籍番号のリスト一覧が閲覧できるようになっている。ただし、アンケートの回答内容は閲覧できない。

このアンケートの学生用の回答用 URL は、

<http://sd.bunri-u.ac.jp/as/>

回答状況確認用 URL は、

https://bunri-u.org/ank20241/as_check.php

である。

昨年度から、本学の教職員が学生の回答状況を閲覧できるシステムを導入した。これは、学生の学修支援をより充実させることを目的としている。閲覧には教職員コードによるログインが求められ、誰でも閲覧できないように制限をかけている。図 7-8 に教員用のログイン画面を、図 7-9 に閲覧したい学生の学籍番号を入力する画面を、図 7-10 に閲覧したい年度の選択画面を、図 7-11 に閲覧画面を示す。

学修状況アンケート（教員用）

教職員グループウェアの利用時と同じログインIDとパスワードを入力してください

【教職員番号】(例：1180000)

【パスワード】(教職員グループウェアのものと同じです)

ログイン >

【連絡事項】（必ずお読みください）

- (1) 本システムの利用は、徳島文理大学の教職員に限定されています。
- (2) 教育目的での利用に限定されています。
- (3) 閲覧内容を他言しないでください。
- (4) 画面のコピーは禁止されています。
- (5) 利用された教職員の教職員番号、閲覧した学籍番号、閲覧した日時等を記録しています。
- (6) PCであればGoogleのChromeブラウザを利用してください。スマートフォンやタブレットのブラウザでも利用可能です。

徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部

図 7-8 回答閲覧システム（ログイン画面）

学修状況アンケートの回答閲覧（教職員用）

閲覧したい学生の学籍番号（6桁）を入力してください

【学籍番号】(例：215200)

次へ >

徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部

図 7-9 回答閲覧システム（ログイン画面）

学修状況アンケートの回答閲覧（教職員用）

学籍番号：215[]
学生氏名：[]
閲覧者教職員コード：1920010

2023年度＜回答済＞

2022年度＜未回答＞

2021年度＜回答済＞

< 戻る

徳島文理大学・徳島文理大学短期大学部

図 7-10 回答閲覧システム（ログイン画面）

学修状況アンケートの回答閲覧（教職員用）

学籍番号：215[]
回答日時：2024/01/30 14:20:29
閲覧者教職員コード：1920010

回答者（あなた）についてお尋ねします

現所属学科の在籍年数を教えてください [必須]

- ☐ 1年
- ☒ 2年
- ☐ 3年
- ☐ 4年
- ☐ 5年
- ☐ 6年
- ☐ 7年以上

いま、あなたが大学でやりたいことをすべて選択してください [複数選択可]

- ☒ 専門的な勉強
- ☒ 基礎的な勉強（語学やプレゼンスキルなど）
- ☐ 最先端の研究
- ☒ 資格や免許の取得
- ☐ 社会貢献（ボランティアなど）
- ☐ 自由な時間を楽しむ（旅行や読書、芸術活動など）
- ☐ 学友との交流（サークル活動を含む）
- ☐ 起業などのビジネス
- ☐ スポーツやトレーニング
- ☐ その他

図 7-11 回答閲覧システム（ログイン画面）

このように、閲覧が必要な学生の回答状況を閲覧できるようになった。学生との個別面談の際に、ここから情報を得ることによってより適切な学修指導が可能になることを期待している。

7-2 点検・評価

ここでは集計結果の概要について述べる。大学でやりたいことをすべて選択させる問い（I-1）については、選択率の高い順に「専門的な勉強」、「資格や免許の取得」、「自由な時間を楽しむ（旅行や読書、芸術活動など）」であった。この状況は4年連続で同じである。選択率もほぼ同じであった。他の質問項目についてもほぼ例年と同水準であった。

着目すべき点としては、新規に追加した質問項目が挙げられる。「あなたは自分をコントロールするよりも、信頼できる誰かにコントロールされる方がいい」という問いに対しては、「そう思う」「ややそう思う」が33%、「そう思わない」「あまりそう思わない」が41%であった。これを踏まえれば、授業中などにおいて学生に対して干渉しすぎるのは好ましくないことが垣間見える。

情報端末を日々の程度利用しているのを尋ねる問いを新たに追加したが、予想に反して「3時間以上」という選択をしたのが半数近くいた。実態を把握できなかったと言わざるをえないので、次回からはこの回答の選択肢を工夫する必要がある。それにしても、ここまで情報端末に依存している状況を教職員は知っておくことは重要であろう。

近年、グループワークやPBLなど集団で学修させるような工夫が授業に取り入れられることが増えている。このような状況に関するように「あなたは集団で学修するより、ひとりで学修する方が好きですか」という問いを新規に追加した。結果は、半数以上の学生が「そう思う」「ややそう思う」を選択した。この結果から、まずは集団的な学修の良さを学生たちは知らないのではないだろうか。もし知っているとすれば、授業においては、集団的な学修と自主的な学修をバランスよく提供することが求められると思われる。

総合評価に関する質問項目では、すべてのスコアが上昇した。本学の教職員全員で取り組んだ改善策が実を結んだ結果だと思われる。これからも満足度や成長感が増えるように様々な取組みを継続すべきである。

6-3 改善計画（改善点）

(1) 質問項目の検討

学修状況アンケートを本格的に実施してから3年が経過した。これにより、アンケート結果を前年度と比較することで学生の学修状況の経時変化を観察することができるようになった。大学全体に関しては前述のとおりであるが、部局別の集計表を利用すれば、各部局における学生の学修状況の全体像を把握することができるようになった。

今年度の実施分については、3つの質問項目を追加、文言の変更が1ヶ所、問いを2つ削除した。学修設備などに関する質問は毎年実施する必要はないと考えているからである。各授業については授業アンケートが存在していることを踏まえれば、学修状況アンケートは、学生の内面的な態度や状態を把握するためのツールであることが望ましい。

質問項目については、この目的に沿ったものを今後も部会で検討し、必要に応じて柔軟に変更していく。

(2) 回答率の向上

授業アンケートと比べるとこのアンケートの回答率は低い。将来的には、このアンケートで退学防止などにも役立てることを目指しているので、回答率が高いほうが好ましい。授業アンケートであれば、担当教員が授業などで直接依頼をかけることができるが、このアンケートでは同様な依頼ができないため、現状では電子メールでの告知（依頼）が唯一の手段である。また、実施期間が後期の授業アンケートや卒業生対象の大学生活満足度アンケートと重複したために、学生に少なからず混乱を招いた可能性がある。次年度以降も、回答率を向上させる方法を検討する必要がある。なお、今年度の部局別の回答状況を表 7-1 に示す。

(3) 回答情報の活用

先述の通り、今年度から各学生がどのように回答したのかを教職員が学修指導目的で閲覧することができるようになった。現状では単年度別の回答を閲覧できるが前年度の変化などを視覚的に把握できない。また、学生自身が過去にどのように回答したのかが閲覧できない。過去の回答を閲覧できれば、みずからの成長を実感したり、自省したりできるので、こういう機能の実装が求められる。これらのことについて次年度以降のFD 研究部会で議論を重ね、回答情報を学生の学修活動にうまく活かす方法を探っていく必要がある。

表 7-1 所属別アンケート回答状況（令和 7 年 4 月 13 日時点）

所属名	在籍数	回答者数	回答率(%)
人間生活学部	1,001	440	44.0
音楽学部	32	7	21.9
薬学部	361	217	60.1
文学部	252	183	72.6
理工学部	314	206	65.6
総合政策学部	281	37	24.3
香川薬学部	226	128	56.6
保健福祉学部	1,085	613	56.5
短期大学部	109	103	94.5
大学院・専攻科他	80	17	21.3
全体	3,742	1,952	52.2

8. おわりに

本学では、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の教諭を目指す学生たちが、たくさん学んでいる。そして、教育実習に行くことになるのだが、限られた期間ではあっても教壇に立って授業担当を経験することになる。まさに一步目の教育訓練である。

同様に、看護師・薬剤師・理学療法士などの資格取得を目指す学生たちも、職場体験で「ヒヤリハット」の事例報告の書き方などを教え込まれることになる。

「FDに不可欠である『事例報告』は、新規に参入する指導補助者に対する教育訓練に有用であるだけでなく、教育実践者一人一人の常なる学習となる」と本報告書3頁に書かせていただいた。

指摘するまでもないが、本学で学ぶ全ての学生たちが、どんな職場に入るとしても、いずれ、「報告」「連絡」の毎日を過ごすことになる。さらには、一番難しいとされる「相談」の受け手にいつかは成長してもらいたいと、学生からいろんな相談を受けてきた教職員みんなが願っている。

本年度も、こうした願いを込めたFD報告書をお届けできることに感謝します。